Japanese Association for Religious Studies

「南岳大師の顔像を尋ね写して揚州竜興寺に着す。勅して法花道場の瑠璃殿の南廊壁上に安置せしむ。」とあり、法華道場の中の一道場であったことがわかる。『法華経』には「阿逸多、若し善男子、我が寿命の長遠なるを説くを聞きて、深心に信解せば、（中略）この娑婆世界、その地瑠璃にして、坦然平正に、閻浮檀金、以って八道を界い云々」として、この娑婆世界が実は瑠璃の浄土であるとの記述がある。況や本尊は閻浮檀金製である。室町時代の善光寺は法華・常行両道場を有していた。現在に至るまで毎日『法華経』が読誦されている善光寺は正に法華道場なのであり、故に本尊安置の場所は『法華経』に依拠して当初は「瑠璃殿」と称されたのではなかろうか。そしてそれがいつしか「宮殿」と混同しないように、特に『瑠璃壇』と変化していったのではないかと思うのである。

『弘智法印御伝記』と即身仏の研究

ジョン・モリス

本報告は日本と日本以外の場所でミイラになった聖なる人々の思想史に関するプロジェクトの一部である。先行研究では、弘法大師入定説が、主に江戸時代のものである「即身仏」に最も重要な影響を与えたことが認識されている。発表者の研究において、弘法大師入定説と『平安往生伝集』における遺体が腐敗しないことに関する瑞相思想の関連性が注目される。また、『元亨釈書』十一などによれば、高野山で空海以外の僧侶が、空海入滅一三三年後に成立された九六八年の『金剛峯寺建立修行縁起』において始めて記録される弘法大師入定説が語るような遺体が腐敗しない話もある。従って、比較的早い段階から真言宗の中において弘法大師の入定を真似ることが見られる。しかし、空海が本当に「入定ミイラ」になろうとしたことは非常に疑わしいので、空海を真似た僧侶は入定説か、空海の思想か、あるいはその両方を真似たのであろうか。即ち、空海の『即身成仏儀』における「即身成仏」との関係は明確なのであろうか。「入定ミイラ」になることが即身成仏することと同様であることを詳しく説明する資料はない。現存最古の即身仏である弘智法印（一三六三年没）に関する資料が比較的豊富である。中には容易に入手できない寺などで保管されている資料があるが、『弘智法印即身仏御縁起』から始まる一時期大変著名であったとみられる弘智法印の伝記となる資料と新潟県海雲山西生寺（智山派）に行って弘智法印を尋ねた人々の記録がある。

その資料の中で特に興味深いのは、本報告の焦点となる一六八五年に成立した『弘智法印御伝記』という江戸時代に人気を集めた浄瑠璃である。弘智法印没二百五十年後に書かれた『弘智法印御伝記』は、もちろん弘智法印の生涯、思想、修行について確実な情報を提供するわけではない。『弘智法印御伝記』の内容は江戸初期の文芸と大衆的宗教思想を反映している。本研究はその作品に見る江戸初期の大衆的宗教における即身仏の捉え方を考察する試みである。平安時代から現代まで即身仏に関する資料のキーワードとなる「往生」、「成仏」、「弥勒」、「弘法大師」などに主眼を置き、本資料に見る理想的な死や、仏に

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

なること、あの世、即身仏になる動機といったテーマを考察する。先行研究は『弘智法印御伝記』の存在について言及するが、内容についての考察は未だ行われていない。本研究は、日本の仏教における聖なる人の遺体が腐敗しないことに関わる信仰と大衆的聖人崇拝と即身仏になるための非常に少数派の修行の理解の一助となるであろう。

本報告の結論として、『弘智法印御伝記』に見る弘智法印の伝説と崇拝を江戸日本の幅広い宗教世界に位置付けたい。『弘智法印御伝記』の思想的曖昧さを強調することによって、即身仏を容易に即身成仏思想と弘法大師崇拝から生じた現象として捉えることを避けることができる。本資料の考察によって、その即身成仏思想と弘法大師崇拝を思想的により幅広い聖人伝文学という文脈の中で捉えることができるであろう。

白山
――『泰澄和尚伝』、『白山記』がかたるもの――

小林一蓁

『泰澄和尚伝』、『白山記』がものがたるものとして、一つは白山修験道の成立がある。白山修験道は泰澄登嶺から出発するが（それ以前は越の御山信仰）、その成立は天長九年（八三二）と考えられ、その象徴として越の御山が白山と命名されたと推考している。この天長九年という年号は白山修験道にとって魅力のある年号だった。白山は如法経修行の道場ともなるが、地方霊場であって「（将門の乱以降）天台宗之繁栄」（『古事談』）の結果、比叡山に組み込まれることになる。即ち十五代天台座主延昌（治山九四六―九六四）の頃には天台末になっており、延昌治山中の天徳元年（九五七、『元亨釈書』泰澄伝は同二年）に『泰澄和尚伝』が浄蔵貴所の口筆として成立したとする設定も了解されよう。

二つに、一般的に女人禁制を根拠に霊山としての威権を保持しようとしていたといえるが、「石同代ト云、社マデ女人ハ参詣スト云々、加賀ハ中宮マデ参詣」とあるように、女人参詣を歓迎している。これを女人禅定と称したい。越前馬場と美濃馬場共通の中宮だった石徹白中居社には千引石（現、磐境）があり、虚空蔵菩薩を祀る本殿とで、白山禅定同様の女人禅定（生まれ清まり）が実施されていたと推定できよう。虚空蔵菩薩は泰澄の本尊であると同時に、女人禅定のための本尊でもあった。つまり生まれ清まりに先立つ変成男子法の本尊でもあった。虚空蔵菩薩を安置していた本殿に覆いがあるのは、女人禅定のための施設を表象しているにちがいない。

三つに、雪の民俗信仰が考えられる。雪はキヨメとも訓むように、雪のもつ偶有性が呪術に用いられた一例である。紀貫之の「年のうちに積もれる罪はかきくらし降る白雪と共に消えなん」でわかるように、雪の民俗信仰とは雪による滅罪、清める機能をいう。白山の命名もここからであるが、雪山でもよさそうなのに白山と命名されたことにはわけがあった。泰澄生誕時の降雪は泰澄の非凡さを賞賛してのことではなく、白山神が影向し、血不浄などからの雪による清めにちがいない。上東門院

NII-Electronic Library Service